

整いました

[マタイによる福音書 25 章 1～13 節]

「そこで、天の国は次のようにたとえられる。十人のおとめがそれぞれともし火を持って、花婿を迎えに出て行く。そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。愚かなおとめたちは、ともし火は持っていたが、油の用意をしていなかった。賢いおとめたちは、それぞれのともし火と一緒に、壺に油を入れて持っていた。ところが、花婿の来るのが遅れたので、皆眠気がさして眠り込んでしまった。真夜中に『花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声がした。そこで、おとめたちは皆起きて、それぞれのともし火を整えた。愚かなおとめたちは、賢いおとめたちに言った。『油を分けてください。わたしたちのともし火は消えそうです。』賢いおとめたちは答えた。『分けてあげるほどはありません。それより、店に行って、自分の分を買って来なさい。』愚かなおとめたちが買いに行っている間に、花婿が到着して、用意のできている五人は、花婿と一緒に婚宴の席に入り、戸が閉められた。その後で、ほかのおとめたちも来て、『御主人様、御主人様、開けてください』と言った。しかし主人は、『はっきり言うておく。わたしはお前たちを知らない』と答えた。だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。」

[1] 「時」は前に進むのみ

今日は2021年の3月7日です。そして時間は10時十何分です。今のこの時間はもう二度と巡ってこない時間ですね。当たり前のことです。けれども、それはとても厳粛なことだと思います。聖書の時間観は「輪廻」ではありません。「人の子よ、帰れ」と神様に言われる時に私たちの生は終わりを迎えます。はじまりがあって、終りがあるのです。繰り返しが利かない、前に進むしかない「時」です。或る意味残酷ですが、ですから、**かけがえがない**のです。

[2] 母の最期を看取って

先週の日曜日、私の両親がそれぞれに地上の命の最後のような時間を生きていると申しましたが、その翌日の月曜日の夜から母の方が危篤状態になり、日付を超えた火曜日の朝、主のもとに召されました。先週は月曜日から告別式を行った金曜日までは本当に飛ぶように時間が経過した感が致します。母は、いわゆる延命措置はしないで良いという意志を表しておりましたから、施設の中で召されて行ったのですが、最後の看取りは、基本的に家族だけの空間の中で

行うことが出来ました。既に危篤状態に入り、少し苦しい息を繰り返している時間はただ見守るしかなかったのですが、妻と二人、ベッドの脇で讃美歌を歌い、「詩編」を朗読したりする時は、時折、聞こえているかのような反応を示したり、うっすらと目を開けるような時も過ぎました。

あとでヘルパーさんや看護師の方に聞いた話ですが、召される前日の昼間、母は関わって下さったヘルパーさんや看護師の方々に「どうしてもありがとうを言わなきゃ」という思いになったそうで、色々なお世話（血圧、酸素の調整、薬を飲ませること、身体を拭くこと、おむつ替えなど）で部屋に入ってきます方に「(今まで)ありがとう」と言っていたということです。涙ながらに話してくれたヘルパーさんの言葉に、私も涙が溢れました。母は恐らく最期の時間が間もなく訪れるということをごどこかで感じていたのかも知れません。

人生の最期をどう迎えるか、整えていくのか、それはとても素朴なことであり、その人の肩書とか学歴とか家柄とか、そのようなこととは全く関係が無いのですね。一人の人間として、私たちも皆そうですが、その日・その時を迎えるのですね。その意味でも、人は平等なのです。

母の最期は、まるで眠りに入ったかのように穏やかなものでした。3/2の未明、私たちも少し疲れてウトウトする時間もあつたのですが、気が付くと苦しそうにしていた呼吸が消えていたのです。「何か静かになったみたい」と妻が言うので母の顔を覗き込むと、確かに既に呼吸が止まっておりました。辛そうな時は「神様、どうぞ母を楽にしてあげて下さい」と私は手を握って祈っていましたが、そのような祈りを神様は聴いて下さり、地上の命から天の命（永遠の命）の中へと移して下さったのだなあと思いました。そこには一きつと皆さんもお分かり頂けると思うのですが一不思議な安堵と、静かな喜びがありました。

[3] 慌てるな

今日の聖書の箇所は、「終末の時」をどう迎えるかというイエス様の譬え話です。それはイエス・キリスト再臨の時への備えであります。それがいつであるかは誰も分からないのです。再臨など無いのではないかと疑うことも私たちには出来ません。けれども私たちは、恐らくはそのイエス・キリストの再臨が起こる前に、自分自身の「終末」をきつと迎えるのではないのでしょうか。私の母のように。これは確かです。そうするとこの話は「今」の話として迫ってきます。

花婿の到着を待つ「10 人のおとめ」のこの譬えですが、この 10 人が特別な者たちだとは思えません。家柄が良いとか、教養や、凄い才能があるとかそのよ

うなことはどこにも書いてありませんね。これは大事なことだと思うのです。ここで問われているのは「信仰」ですから。「信仰」の世界は、この世の価値観が通用しないのです。人は誰も生き、そして死んでいく。いくら財産を持っていても死後の世界（神様の世界）を左右出来ません。逆にどんなに人間の目からはどん底の様な人生であったとしても、死後の命もその延長だなどということもないのです。これは大きな希望ですね。

この10人は、全く半分に「賢いおとめ」と「愚かなおとめ」に分かれて描かれます。それはただ一点、ランプのともしびを絶やさない為の油の備えをしていたか否かという、とても単純な相違が両者を分けています。

旧約の預言者アモスは「あなたの神に会う備えをせよ」(アモス 4:12)と言いましたが、**終わりの日**というのは、死後は永遠の生命が与えられるかもしれないという漠然とした希望を夢見ることではなく、**あなたの神様とお出会いする、そのことを喜べる心の備えが出来ているか、整っているか?**ということが本質なのです。それはある意味、**とても個人的な神様との関係**です。ですから、この譬えの中で油を用意していなかったおとめたちに、油を持っていたおとめたちは分けてあげていませんけれども、**分けてあげられない**のです。神様との関係ですから。とってつけたような「付け焼刃」の信仰というのは、その時オロオロしてしまうでしょう。ここで愚かな5人は慌てていますよね。

私はこれを読んで思いました。「信仰」とは慌てないことなのだ。「信じる者は、慌てることがない」(イザヤ 28:16)との言葉もあります。先週、ロバの子にお乗りになったイエス様の話を味わいました。幼い子ロバに跨り、ゆっくりゆっくり前進するイエス様です。ある教会員の方がこの部分がとても印象的だったとお手紙下さり、とても嬉しかったです。このイエス様は「誰よりも遅い方」だということ。けれども逃げずに、堂々と私たちの救いを成し遂げるためにエルサレムに入って来られた。それは、私たち一人ひとりの人生そのものを背負うためです。そのためには主は決して慌てない。一步一步着実に前へと進んで行く。今日は主の晩餐式も執り行いますけれども、あの場面もそうです。イエス様は神様の救いの御計画をなすために、周到な備えをなさったのです。文字通りご自分のお体を刻むようにしてです。**その延長線上に十字架が立っています**。十字架は決して偶然の出来事ではありません。神様ご自身の、**永遠の昔からご用意された「油」**なのです。

[4] 喜んで主にお会いする用意を！

この譬え話はある意味教訓です。それは単純な言い方をするなら、**信仰生活は**

楽をするな、ということではないだろうか。何故なら楽をすると本当の意味で喜びは無いからです。神様というお方は私たちの弱さを思いやることのできないお方ではないと思います。この譬えの10人の乙女、「目を覚ましていなさい」と言われますが、**みんな眠ってしまった**のです。神様にとって、その弱さは織り込み済みなのですね。けれども、神様はイエス様と一緒に宴席の場が**本当に喜びとなるためには**、後ろめたい思いを抱えてではなく、「**ああ、イエス様にお目にかかれた!**」と、嬉しさが溢れるようにしてお会いしたいではないですか! そのように日々整えて行くこと、**単純な信頼を持つこと**。それが「油」なのかもしれません。

そしてもう一つ。この油は、聖書にある、あの罪の女がイエス様の頭（こうべ）に惜しげもなく注いだ**ナルドの香油**（マタイ 26 章 6 節以下）のようなものでもあると思います。つまり、**悔い改めの油**です。実際、私たちは神様の前に堂々と立てない存在です。そんなことは、神様は百も承知です。ですから、**ヨハネの手紙一の 2 章**がとても大事だと思うのです。—「**わたしの子たちよ、これらのことを書くのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。たとえ罪を犯しても、御父のもとに弁護者、正しい方、イエス・キリストがおられます。この方こそ、わたしたちの罪、いや、わたしたちの罪ばかりでなく、全世界の罪を償ういけにえです**」（ヨハネー 2:1~2）。

本来**裁き主**である方が、私たちの**最強の弁護士**となって下さっているというのですね。おかしな裁判です。私たちはそこで「**無罪**」を頂くのです。罪人であるにもかかわらず、**十字架の身代わり**によって。そして私たちは**復活の命**に与るのですね! それ**が「祝宴」**です。**神の国の宴**です。そこに喜んで迎えられたいではないですか。このおとめたち、**5人と5人**なのですね。どちらが多数ということではない。私たちはどちらでもなり得るということです。いやこれは私たちの心の中かもしれません。眠ってしまう弱さを皆持っている。そういう限界を持っている。また、もしかしたら「**これで安心だ**」なんて思って、あぐらをかいてしまう私たちの心がある。だからこそ、私たちはこのように毎週悔い改めを持って神様の前に出て行くということが大事ですよね。**神様は私たちのことを覚えて下さっています。その神様を私たちも覚えていく。十字架のもとに集まる。**それ以上に神様にお会いする準備は無いのではないのでしょうか。今日のこの礼拝も、その備えであり、また先取りでもあるに違いありません。

お祈り致します。